

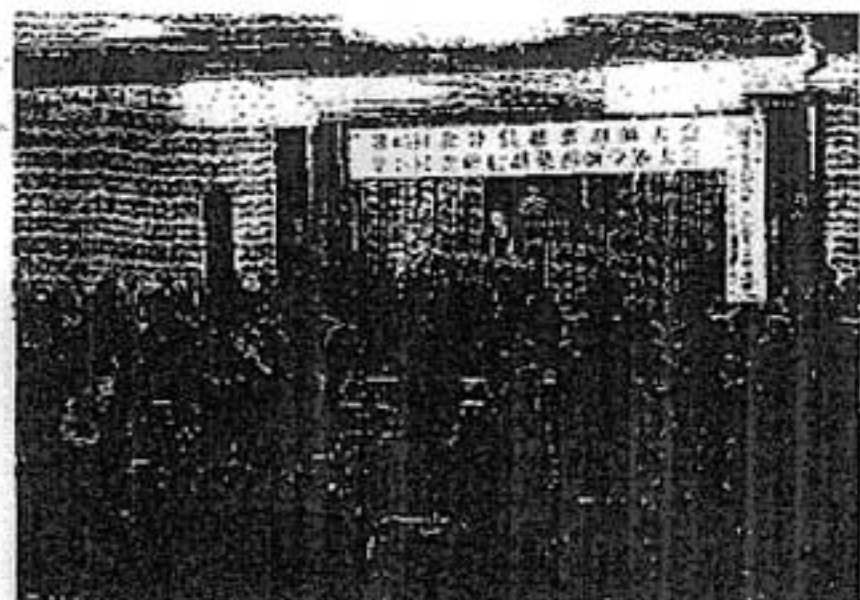
大学教授が薬局で研修

金沢大 鈴木氏

現場知る意義を強調

北陸信越 薬剤師大会

「時代と社会の要請に感える薬剤師」をメインテーマに、第45回北陸信越薬剤師大会・第38回北陸信越薬剤師学術大会が26、27の両日、600人以上の薬剤師が参加して長野市で開催された。大会は臨床薬学、地域医療、環境衛生の3分科会に分かれ、全部で33題の口頭発表と9題のポスター発表が展開された。



地域医療分科会ではアカンサス薬局（石川県）の鈴木水雄氏が、薬学教員の薬局研修について報告した。鈴木氏は金沢大学薬学部の教授でありながら、同薬局で薬剤師として研修を受けている。その理由について鈴木氏は、これまで金沢大の教員には病院薬剤師の経験者がいても、薬局薬剤師の経験者がいなかったためと説明。

その上で、「長期実務実習では実習前教育、プレ実習の充実が不可欠。さらに実習施設において大学教員自身が、指導者として参画することが必要になってくるだろう」とし、教員が薬剤師業務の現場を知る重要性を訴えた。

市民調剤薬局（新潟県）の渡辺真樹子氏は、保険薬局としては例の少ないD1室の設置について発表した。渡辺氏は「様々な情報が、先輩薬剤師から口頭で伝えられる状況では、時間の経過と共に風化してしまう。また個々の薬剤師によって学習の内容や質に差があると、患者への指導内容に違いが生じる危険性もあった」と指摘。そこで同薬局ではD1室

を設置して専任の薬剤師を1人配置すると共に、店舗ごとに各1人のD1担当薬剤師を決め、D1業務の見直しを開始した。これにより多くの成果が得られたが、中でもMRの有用性が非常に高いことが明らかになった。渡辺氏は「D1室を設置し、その目的を理解してもらおうことで、MRの訪問回数が増え、MRは医師と接している。MRは医療現場の情報に詳しい」とし、MRからの情報を薬局業務に生かせるとの考えを示した。

分科会に引き続いて表彰式なども行われ、5人に北陸信越薬剤師会賞が授与された。大会会長の小栗睦司長野県薬会長は、薬学6年制に向けては指導薬剤師の育成が最重要課題とした上で、「切磋琢磨して質の高い薬剤師とされるように、生涯教育に取り組みなくてはいけない」と述べ